

第4章

結合価の範疇素性

4.1 はじめに

第1章と第2章では結合価の範疇素性が〈名詞組〉と〈副詞〉からなることを明言しながら、具体的な考察に立ち入る余裕はなかった。第3章ではわずかながら「第5形引用文」は実は範疇素性の副詞に属すると述べた。

本章は、結合価の範疇素性である名詞組と副詞の実態を解明しようとする所に目的がある。

4.2 文成分の範疇素性

日本語の文は構造的に述語が存在すれば、成り立つ。この点からみれば、述語はいわば文構造の核心である。述語の支配する文成分の範疇素性は述語そのものの文法的な結合能力の違いによっておよそ①名詞組②副詞の二つの種類に分けられる。

まず第一に、名詞組は名詞に助詞の付いたものであり、従来の「名詞句」や「補語」などの用語に相当する。

第二に、副詞について言えば、助詞の付いたものとそうでないものがある。次の例文を参照されたい。

(1) 昔、あの人に夢中だったのに、今はなんとも思われな^いのがわれながら不思議だ。

(国語)

(2) ときには大いにハメをはずす。(国語)

(3) 本人のためだと思^って、ときには注意することもある。(国語)

(4)家が破産したため(に)、破談になった。(国語)

(5)天気が悪かったので、外出できなかった。(小学)

用例(1)は助詞のついていないもの、(2)(3)は助詞「は」の付いたもの、(4)は(1)と(2)(3)の中間的なもの、(5)は「ので」の付いたものをそれぞれ示す。注意すべきは、(3)の「て」、(4)の「ため(に)」と(5)の「ので」がいずれも補文付きの副詞に相当する点である。ちなみに「ので」のような接続助詞つまり補文付きの副詞は名詞性が薄れ、副詞性が強まっていることに注目されたい(注1)。この点に関しては、一見逆説だが、名詞性が強いものは格助詞を添加させるのに対して、副詞が強いものは接続助詞を付け加えると言えよう。それはともかくとして、上述した用例では下線部のいずれも、本章の〈副詞〉に属している。

第三に、従来の「引用文」は決まって引用文と助詞「と」を組み合わせたものと考えられているが、結合価文法においては補文付きの副詞の一つと解釈される。次の用例を参照されたい。

(6)「行きたくない」と彼女は言いました。(サン)

(7)彼にすぐに連絡するようにと母は言った。(高校)

(8)心配するなど彼は言った。(サン)

(9)お客はお金を返せと言った。(高校)

(10)かかりつけの医者は専門医にみてもらったほうが良いといった。(小学)

つまり直接引用文にしる、間接引用文にしる、あるいは両者の中間的な未分化のものにしる、いずれも補文付きの副詞によってしめくられる故に、副詞的機能に近いと言わざるをえない。

4.3 必須成分の範疇素性

結合価文法の研究は、述語なканずく動詞が中心となつて行われる。当然のことながら、動詞にとって必須成分とはなにかという基本的問題は避けて通れないものであろう。これについてはすでに多くの研究がなされているが、動詞の必須・随意成分に関しては、〈名詞組〉では各家に共通するものはまだ見いだせないのが現状であろうが、名詞と格助詞「が」「に」「を」格という三つの形の任意の組み合わせは動詞の必須成分に近い傾向に

ある(注2)。

思うに、文はおよそ命題とムードからなっている。ありとあらゆる動詞はそれぞれの語彙クラスによって文法的結合能力が違うが、結合価文法のいわゆる動詞の文法的結合能力は動詞的単語結合に相当するものであり、その内容は命題に関するものと言えよう。注意すべきは動詞の実現、正確に言えばある動詞クラスの実現に伴う名詞組と副詞がいずれも必須成分に属するばあいもあるし、随意成分に属する場合もある点である。そして文との関係を示せば次のようである。

命題	ムード
<名詞組><副詞>動詞	ボイス、アスペクト、モダリティ 位相(注3)

本章ではもっぱらある動詞クラスの実現に不可欠な名詞組と副詞からなる必須成分を中心に考察したい。こうすることによって、一見ばらばらに存在する個々の動詞の共通性の必須成分をまとめ、同じ動詞クラスに所属させる一般化ができると思う。例えば、「焦る」「意図する」「思い立つ」「思う」「考える」「企図する」「決める」「工夫する」「計画する」「決意する」「決心する」「志す」「試みる」「誘う」「企む」「誓う」「努力する」「目指す」「もがく」「目論む」「心を配る」などの動詞の共通性の必須成分の一つとして補文付きの副詞「と」が取り上げられる。次の用例を参照されたい。

- (11) 討論の中心的な地位を占めようと彼は努力している。(会話)
 (12) 彼らはいかだで太平洋を横断しようと計画した。(アン)
 (13) 巢から落ちたひなは起き上がろうともがいて羽をばたつかせている。(国語)
 (14) 彼は新しい仕事を始めようと意図している。(アン)
 (15) この入は常に客観的であろうと心を配っている。(ロワ)

例えば、(11)～(15)の動詞「努力する」「計画する」「もがく」「意図する」「心を配る」はいずれも「中心的な地位を占めようと」「いかだで太平洋を横断しようと」「起き上がろうと」「新しい仕事を始めようと」「常に客観的であろうと」などの補文付きの副詞「と」を持つ点で同じ動詞クラスに所属させると言えよう。もちろん、一つの動詞は一つの動詞クラスではなく、

二つあるいはそれ以上の動詞クラスに属する場合もありうる。例えば、次の用例から動詞「疑う」が五種類の動詞クラスに属することが分かる。

- (16) 被告側弁護士は証人の真実性を疑った。(高校)
- (17) 彼が無実であることは疑う余地がない。(サン)
- (18) ぼくは彼の言葉が信用できるものかどうか疑う。(日文)
- (19) 彼がお金を横領したのではないかと疑った。(小学)
- (20) 警察側は私を犯人ではないかと疑っている。(日文)

つまり用例(16)では①名詞組二つ、(17)では②名詞組一つと補文付きの「こと」名詞組一つ、(18)では③名詞組一つと二者択一の疑問文である名詞組一つ、(19)では④名詞組一つと「(の)(ではない)か」とを添付させる副詞一つ、(20)では(19)と似ているが、⑤名詞組一つと、副詞から繰り出した主語たる名詞組一つと、残された「(の)ではない)か」とである副詞一つというように、それぞれ決まった動詞クラスに属する。詳しく言えば①は「愛する」「味わう」「誤る」「弄る」「労る」、②は「意味する」「表す」「計画する」「実行する」「発見する」、③「決定する」「試験する」「調べる」「心配する」「予想する」、④「心配する」「怪しむ」「思う」「危ぶむ」「恐れる」、⑤「思う」「恐れる」といったふうに、各々の動詞クラスに規則的に組み込まれている。

またいくつかの動詞が同じ副詞である動詞クラスに入ったとしても、その下位分類としての内容が必ずしも全く同じであるとは限らない。次の用例を参照されたい。

- (21) 全国民は仏に平和が訪れるように(と)祈っている。(日文)
- (22) 兄は私に、強く生きるように教えた。(日文)
- (23) 私は学生に、子供の面倒をみてくれるように頼んだ。(日文)
- (24) 被害者は警察に、事件を捜査してほしいと頼んだ。(日文)
- (25) 私は店員に、子供が食べるすしからワサビを抜くように注文した。(日文)
- (26) 組合側は会社側に、約束を早く実行してほしいと注文した。(日文)
- (27) 花子は先生に単位を落とされないように頑張った。(日文)
- (28) 姉は、演奏会を成功させようと頑張っている。(日文)
- (29) 母は、もっと支出が減るように工夫している。(日文)

(30)そして、逆におもしろい略称を作ろうと工夫しているうちに、その新しい提案
なり政策なりの……(発表)

(31)指揮官は手まねで部下に静かにするよう(に)合図している。(日文)

(32)兄は妹に眼で「来い」と合図した。(日文)

(33)社長はスタッフに、明日レポートを出すように命令した。(日文)

(34)警部は部下に、容疑者のアリバイを徹底的に洗えと命令した。(日文)

用例(21)~(34)に共通なのは副詞であるが、「基本形プラス『よう(に)(と)』を除いて、その内容はかなりばらつきがある。「~するよう(に)(と)」は「基本形プラス『よう(に)(と)』」、「~してほしい」は「音便形プラス『てほしい』」、「~しようと」は、「意志形プラス『ようと』」とすれば、次のようにまとめられる。

祈る	~するよう(に)(と)	~してほしいと	頼む、注文する
教える		~しようと	頑張る、工夫する
		~しろと	合図する、命令する

注意すべきは、これらの副詞が細かい内容をめいめい異にしているが、「と」でしめくられる点で一致しているところである。かくて、結合価文法の記述分析に際してはまず個々の動詞の添付させる名詞組と副詞をまず解明し、次にこれらの動詞から共通な成分を抽出し、いくつかの動詞クラスにまとめるのが筋道であろう。

これは命題ばかりでなく、「ムード」に含まれるボイス・アスペクト・モダリティ・位相のいずれも動詞クラスに基づいて決まったパターンをとる場合がある。例えば、次の例文からわかるように「噛む」は名詞組[…が…を]を取るにより他動詞と、「噛み付く」は名詞組「…が…に」を取るにより自動詞と書いてあるのが従来の辞書の扱い方である。しかし、ボイスの観点から見れば、このような扱いは果たして理にかなうか甚だ疑問であろう。

(35)犬が通行人を噛んだ。

(36)犬が通行人に噛み付いた。

(37)通行人が犬に噛まれた。

(38) 通行人が犬に噛み付かれた。

つまり受け身の形に関しては用例(35)(36)はいずれも同じパターンを示している。言い換えれば、このような動詞の自・他の区別はあまりにも形式にとらわれ、実際の言語運用面に何の役も立たないのである。もう一例をあげれば、動詞「背く」は現代語では専ら[…が…を]を取ることで、他動詞として扱われている。次の用例を参照されたい。

(39) 国王の仰ごとをそむかば、殺し給ひてよかし。(竹取)

さらに動詞「懂れる」「注意する」などは自動詞として[…か…に]を取っているのが普通だが、偶には[…が…を]を添加させる用例もある。

一方、受け身を作りにくい動詞クラスが存在することに注目されたい。例えば、「喧嘩する」「結婚する」「付き合う」「走る」「離れる」などの相互動詞と移動動詞である。

アスペクトに関しては、すでに奥田(1978)では「ている」の基本的意味は「継続」であるが、基本的に他動詞の種類によって「動きの継続」と「変化の結果の継続」に分けられている。「動きの継続」は「主体的変化がないもの」、「変化の結果の継続」は「主体変化がある」に属する(注4)。前者は「歩く」「走る」「流れる」「泳ぐ」「すべる」「たたく」「殴る」「ける」「振る」「投げる」「開ける」「閉める」「作る」「塗る」「削る」、後者は「開く」「閉まる」「できる」「こわれる」「直る」というように、個々の動詞の語義によってその分類が決まるのがほとんどである。

モダリティについても同じことが言える。例えば、「開く」は「開くな」「開け」「開こう」、「閉まる」は「閉めるな」「閉まれ」「閉まろう」、「できる」は「できるな」「できろ」「できよう」、「こわれる」は「こわれるな」「こわれろ」「こわれよう」、「直る」は「直るな」「直れ」「直ろう」といったふうに、ある動詞クラスにとっては禁止形・命令形・意志形の使い方がもともと存在しない。

位相の場合もそうだが、事情はやや複雑である。例えば、「申す」といった動詞は常に主体の動き(自分のこと)をへりくだって表す謙讓語に属するのに対し、「おっしゃる」は逆に主体の動き(相手のこと)を立てて表す尊敬語に属する。また、動詞といつても、書き言葉と話し言葉との区別があり、年齢・職業などによって異なる場合もある。現段階では有る程度の動詞クラスにまとめられるが、さらに深く追求するためには、個々の動詞の語義を

細かく分析・記述するほかはない。

今まで動詞の文法的結合価能力を一通り述べてきたが、以下動詞の実現に不可欠な必須成分を添加させる動詞クラスのパターンをまとめてみよう。

まず次の用例を参照されたい。

- (40)彼女は玄関であるじに元気よく「おはようございます」とあいさつした。(旺文)
 (41)彼は損を取り返そうとして焦った。(日文)
 (42)駅に近づいたので、わたしは本をかばんにしまって、ゆっくり席を立ちました。(国語)
 (43)彼女はもう少しで煙に巻かれるところを助かった。(サン)
 (44)バスの中で気持ちが悪くなった。(サン)

例文(40)では「(彼女が)」「あるじに」「『おはようございます』」は必須成分、「彼女は」「玄関で」は随意成分、(41)では「(彼が)」「損を取り返そうと」は必須成分、「彼は」は随意成分、(42)では「(わたしが)」「席を」は必須成分、「わたしは」「駅に近づいたので」「本をかばんにしまって」「ゆっくり」は随意成分、(43)では「(彼女が)」「もう少しで煙に巻かれるところを」は必須成分、「彼女は」は随意成分、(44)では「気持ちが」「悪く」は必須成分、「バスの中で」は随意成分をそれぞれ示す。

ちなみに必須成分については(40)では「彼女が」「あるじに」は名詞組、「『おはようございます』」は副詞、(41)では「彼が」は名詞組、(43)では「彼女が」「もう少しで煙に巻かれるところを」は名詞組、(44)では「気持ちが」は名詞組、「悪く」は副詞にそれぞれ属している。

もちろん、動詞クラスのパターンは動詞の必須成分の意味役割に左右される。これらの必須成分を簡潔に表現するためには、次のように記号を工夫してある。

[]	必須成分の内容を示す。例えば[…が…に]。
…	名詞を示す。例えば「結合価文法」。
～	補文全体を示す。例えば「彼の声は感激に震えていた」。
…く	特に(副詞)を示す。例えば「大きく」「綺麗に」「あっさり」。
～て	補文が「て」を添加させる補文付きの副詞。例えば、「息子の成績

	が落ちて」。
ヲ	特に経由・通過・出発点を示す格助詞。
=	二者択一を示す。例えば[…に(=で)]は[…に]か[…で]かのいずれかである。

かくて、動詞の実現に不可欠な必須成分の範疇素性である名詞組と副詞パターンは次のように整理されよう。

名 詞 組	副 詞	述 語
[…が]	[…く]	動 詞
[…が…に]	[…て]	
[…が…を]	[…と]	
[…が…ヲ]	[…するよう(に)(と)]	
[…が…を…に]	[…しろと]	
	[…しようと]	
	[…してほしいと]	

注意すべきは、動詞パターンによって①名詞組では一つか二つあるいは二つ以上の場合もあるし、[…を]は動来・作用の対象、[…ヲ]は動作の経由・通過・出発点を意味する格助詞を示す②(副詞)では上表に出る[…く][…て][…と][…するよう(に)(と)][…しろと][…しようと]などの内の一つだけが有効的である③これらの①②の条件に応じる名詞組プラス副詞かのどちらかの組み合わせがあり得るなどの点である(注5)。

なお、[…するよう(に)(と)]は、文が基本形プラス「よう(に)」プラス「と」、[…しろと]は文が命令形プラス「と」、[…しようと]は文が意志形プラス「と」、[…してほしいと]は文が補文付きの副詞「て」プラス「ほしい」プラス「と」でしめくられることに注目されたい。もちろん[…しろと]は[…しなさいと]などによって置き換えられ得る。

以下必須成分の範疇素性である名詞組と副詞の内容を、順を追って記述し、動詞クラスのパターンを立てようと思いたい。記述に際しては、各家により結合価の意味役割の分類法が違うため、ここに専ら形態論的に助詞を中心に絞ると一言付け加える(注6)。

4.4 必須成分の名詞組と副詞

以下必須成分の名詞組と副詞の分析・記述に際しては(A)名詞組(B)補文付きの名詞組(C)疑問文付きの名詞組(D)組み合わせられた名詞組と副詞(E)組み合わせられた名詞組と補文付きの副詞と五つのパターンに下位分類される。

(A)名詞組の場合

a[…が]

[…が]を取る動詞クラスは動きの主体だけが存在するものだが、自動詞として扱われているのが従来の辞書のやり方である。例えば、次の如きがこの動詞クラスに属するものである。

相次ぐ、荒れる、俯く、運動する、衰える、枯れる、涸れる、外出する、活動する、乾く、渴く、利く、効く、砕ける、草臥れる、狂う、行動する、凍る、呼吸する、故障する、壊れる、混乱する、栄える、錆びる、冷める、湿る、食事する、進歩する、空く、透く、澄む、絶える、経つ、出来あがる、尖る、整う、調う、煮える、匂う、濁る、発達する、張る、切る、晴れる、腫れる、膨らむ、膨れる、冷える、塞がる、太る、降る、滅びる、乱れる、実る、目立つ、儲かる、痩せる、止む

思うに、もともと動詞という概念は多くの主体に共通な動きを抽出したものであるゆえに、主体なしの動きはどういありえないから、すべての動詞に必ず主体が含まれているのは贅言を待たない、日本語に即して言えば主体はほとんどが「が格」によって表現される。ここで「ほとんど」と言っているのはわずかな例だが、例えば、「停電」「断水」「春めく」などのようにすでに「電気」「水」「春」という主体が動詞に内蔵されているだけに、あらためて「が格」を添加させる必要はないからである。

b[…が…に]

[…が…に]を取る動詞クラスについて、森山(1988)は、「に格」は動詞の語義によって「で」「へ」「と」「に対して」「に向かって」「によって」に置き換えられる場合があると指摘し、次の例文を示している。

- ・旅館に(=で)泊まる
- ・京都に(=へ)着く
- ・恋人に(=と)なる
- ・水がアルコールに(=と)混ざる。
- ・彼に(=に対して)抵抗する
- ・彼に(=に向かって)近づく
- ・失敗に(=によって)悩む

しかし、これは何も上述したものばかりではなく、「を」と「として」にも置き換えること出来る。例えば、次の例文を参照されたい。

(46)部長は会議に(=を)欠席している。(日文)(注7)

(47)弟は試験に(=を)しくじってがっかりした。(日文)

(48)会社は重役会で台南に工場を建てることに(=を)決めた。(日文) (49)
兄はたばこをやめることに(=を)決心した。(日文)

(50)教員たちは9月28日にデモを行うことに(=を)決定した。(日文)

(51)母は、子供が嘘をついたのに(=を・で)怒った。(日文)

(52)登山隊が地図に(=を)転って山道を行った。(日文)

(53)彼は期末試験に(=を)滑った。(日文)

(54)妻は、息子の成績が上がらないのに(=を・で)悩んでいる。(日文)

(55)先生が生徒に(=を)乱暴している。(日文)

例文(46)～(55)では「に」は「を」に置き換えられる。(48)は「決める」、(49)は「決心する」、(50)は「決定する」といったふうに「に」と「を」との置き換えが可能なのは、これらの動詞がいずれも補文付きの名詞「こと」を添加させることに注目されたい。そうでなければ、「を」しか取らない場合に限る。つまり、「決める」「決心する」「決定する」においては「を」は本義であるが、「に」は転義であると解釈されるのである(注8)。

また、(51)(54)では、「怒る」と「悩む」の「に」は「を」のみならず、「で」にも置き換えられることは興味深い現象である。意味的に同じ動詞クラスに入る「困る」「苦しむ」「酔う」など

の「に」は「で」だけに置き換えが可能である。ちなみに森田(1985)では「何をそんなに慌
てているのですか」のように「何で」の代わりに意味的に「何で」に近い「何を」を使うのが
普通だと指摘し、次の動詞クラスを列挙している。

急ぐ、驚く、感心する、困る、泣く、恥ずかしがる、腹を立てる、悔しがる、思いつめ
る、ふさぐ、はしゃぐ、喜ぶ、うれしがる、跳びはねる、おびえる、くよくよする、にこに
こする

勿論「…が…に」か「…か…を」かのいずれかを取るかが名詞の意味役割によって決ま
る場合もある。以下、その例文を参照されたい。

- (56) 手当は8月に遡って支給されることになった。(日文)
- (56) 舟をこいで川を遡る。(日中)
- (57) 彼女はとても私の母に遠慮している。(日文)
- (57) 私はその招待を遠慮した。(日文)
- (58) 亡き師の教えは、今でも、私たちの心の中に生きています。(国語)
- (58) 私たち一人一人が、かけがえのない自分の人生を生きているのだ。(国語)
- (59) 私たちは毎日テレビに接し情報を得る生活を送っている。(日文)
- (59) 部屋が狭いので、お互いにひざを接するほど詰めて座った。(日文)
- (60) 基金額は100万に達した。(高校)
- (60) 彼女はとうとう自分の目標を達した。(日文)
- (61) 台湾独立は重大問題だから、民意に問う必要がある。(日文)
- (61) 新聞は事件を大きく取り上げて、会社の責任を問うた。(日文)
- (62) 波が浜辺に寄せてきた。(日文)
- (62) 一家は夫婦の収入を寄せて、何とか暮らしている。(日文)
- (63) 私は、この事は世間に恥じない行為であると信じている。(日文)
- (63) 犯人は会社に対して罪を恥じ、反省を示した。(日文)

用例(56)～(63)はいずれも名詞の意味役割によって「に」か「を」を添加させる。表にま
とめれば次のようである。

用例	名詞の意味役割	
	「に格」	「を格」
(56)(56)'	時間	河川
(57)(57)'	人	物事
(58)(58)'	場所	同族目的語
(59)(59)'	物事	身体
(60)(60)'	数量	目標
(61)(61)'	擬人化	抽象名詞
(62)(62)'	場所	金銭
(63)(63)'	擬人化	抽象名詞

つまり、[…が…に]と[…が…を]は意味的にお互いに相補分布をなすのである。実際、この二つのパターンに跨る動詞が現れていることから、現代日本語ではこの二つの名詞組が融合して一つの名詞組になりつつあるということがうかがわれる。ただ、[…が…ヲ]は上述したように別の機能を果たしているので、存在する価値が大いにある。

c. […が…を]

[…が…を]を取る動詞クラスは動きの主体が対象に変化をもたらすか影響を与えるものであるから、従来の辞書では他動詞として扱われているのが普通だ。例えば、次の如きがこの動詞クラスに属するものである。

愛する、明かす、浴びる、誤る、弄る、労る、営む、嫌がる、受け付ける、産む、生む、裏切る、演じる、補う、行う、襲う、織る、伺う、願みる、省みる、掻き回す、嗅ぐ、囲む、囁く、稼ぐ、兼ねる、庇う、被る、からかう、刈る、傷付ける、食う、区切る、組み立てる、経験する、計算する、化粧する、跳る、合計する、漕ぐ、好む、ごまかす、堪える、遮る、採す、捜す、指す、察する、冷ます、妨げる、仕上げる、支配する、閉める、諦める、洗める、修理する、受験する、手術する、出版する、信仰する、信用する、罵る、攻める、責める、選択する、掃除する、剃る、尊敬する、代表する、耕す、炊く、揺

まえる、掴む、作り上げる、懐む、摘む、貫く、連れる、尊ぶ、解く、説く、遂げる、退ける、整える、調える、揃える、捉える、取り消す、取り締まる、取り巻く、慰める、嘆く、歎く、撫でる、怠ける、嘗める、舐める、睨む、煮る、脱ぐ、狙う、練る、除く、臨む、飲み込む、飲む、呑む、穿く、履く、励ます、はじく、発明する、省く、引き受ける、引き出す、弾く、捨てる、冷やす、拾う、振り向く、放る、募集する、祭る、見上げる、見合わせる、見送る、見渡す、剥ぐ、捲く、目指す、物語る、揉む、催す、養う、養う、休める、破る、敗る、有する、茹でる、汚す、弱める、料理する、論じる

ここで取り上げたのは主体と対象が共演している動詞クラスである。この動詞クラスはこれに属する個々としての動詞の主体が対象に変化をもたらすか否かによって二つの種類に分けられる。これはボイスの問題に関係するが、ここでは触れない。注意すべきは上述した動詞はいずれも名詞組[…が…を]を一つしか添加させない点である。

d[…が…ヲ]

[…が…ヲ]を取る動詞クラスはもっぱら動きの起点・経由・通過を示したり、同族目的語である対象を伴ったりするものであるが、従来の辞書では自動詞として扱われている(注9)。上述の[…が…を]から区別するためにわざとその内の「を」を「ヲ」に書き直すことにした。この動詞クラスに入る動詞は、例えば、「超える」「卒業する」「通過する」「伝う」「終わる」などである(注10)。もちろん、次の如きもこの動詞クラスに組み込まれる。

開く、歩む、歩く、生きる、行く、動く、歌う、移る、落ちる、踊る、泳ぐ、降りる、下りる、終わる、通う、変わる、下る、転がる、下がる、去る、散歩 する、過ぎる、過ごす、進む、黙る、垂れる、通じる、伝わる、出る、通る、飛ぶ、流れる、逃げる、抜ける、逃れる、上る、登る、入る、這う、走る、外れる、離れる、跳ねる、舞う、曲がる、回る、旅行する、渡る

起点を表す「を」は「から」によって置き換えられることが多いけれども、「煙が部屋を出る」とは言えないのは主体の「煙」が有情ではないからである。だからといって「彼女が大学から出る」が成立するとは限らない。つまり、「大学から出る」は「大学を卒業する」と違って、具体的場所を離れることを意味する。両者の微妙な違いはちょうど英語の「to go to the

school"と"to go to school"に似ている。「家を出る」「大臣の椅子を下りる」なども固定した言い回しとして同じグループに入ろう。

一方、上述した動詞クラスのうち、「開く」「移る」「終わる」「垂れる」「外れる」などは自、他動詞の対立をなすペアである「開ける」「移す」「終える」「垂らす」「外す」と違って、主体が対象に変化をもたらさないことに注目されたい。言い換えれば、こういった類の動詞は意味的に意志性を持たないものであろう。

e.[…が…を…に]

[…が…を…に]を取る動詞クラスは、主体・対象・客体三者が共演しているものである。従来の辞書には他動詞と書いてあるのが普通であろう。もちろん、前節と同じく、[…が…ヲ…に]の動詞クラスもあるので、次節で触れる。まず、次の動詞を参照されたい。

上げる、挙げる、集める、当てる、編む、謝る、表す、合わせる、言い付ける、生かす、頂く、戴く、痛める、祈る、入れる、受け取る、受ける、埋める、歌う、打ち明ける、打つ、写す、映す、訴える、埋める、恨む、売る、描く、選ぶ、置く、送る、追う、起こす、興こす、押さえる、抑える、収める、納める、借しむ、押す、教わる、落とす、驚かす、帯びる、覚える、思う、降ろす、下ろす、卸す、解釈する、買う、変える、換える、抱える、掲げる、書く、隠す、掛ける、架ける、賭ける、重ねる、飾る、教える、片付ける、傾ける、固める、担ぐ、構える、借りる、感じる、着換える、聞く、刻む、築く、着せる、希望する、教育する、許可する、切る、禁止する、崩す、汲む、決定する、拵える、擦る、断る、奪す、込める、転がす、壊す、催促する、裂く、叫ぶ、差す、射す、注す、刺す、挿す、授ける、誘う、定める、質問する、指導する、支払う、縛る、絞る、仕舞う、示す、主張する、準備する、知らせる、記す、印す、推薦する、捨てる、する、整理する、背負う、説明する、迫る、世話する、選択する、育てる、備える、染める、揃える、倒す、焚く、抱く、蓄える、確かめる、足す、出す、尋ねる、訪ねる、畳む、立てる、建てる、倒れる、喰える、頼む、ためらう、溜める、貯める、誓う、縮める、注意する、注文する、貯金する、散らす、費やす、使う、作る、造る、付ける、着ける、漬ける、告げる、都合する、伝える、続ける、突っ込む、包む、連ねる、列ねる、釣る、吊る、吊す、訂正する、通す、溶く、届ける、飛ばす、止める、留める、泊める、取り替える、取り換える、取る、治す、直す、流れる、無くす、投げる、成す、習う、做う、鳴ら

す、並べる、握る、縫う、抜く、濡らす、願う、捻る、乗せる、望む、延ばす、述べる、掃く、吐く、挟む、弾む、話す、離す、放す、嵌める、生やす、払う、張る、貼る、引きずる、引く、浸す、引っ張る、表現する、広げる、広める、含む、塞ぐ、ぶつける、増やす、殖やす、振る、触れる、膨らす、勉強する、報告する、誇る、干す、保存する、巻く、負ける、曲げる、混ぜる、交ぜる、纏める、学ぶ、真似る、回す、見せる、滴たす、導く、見付かる、見つける、迎える、向ける、結ぶ、命じる、命令する、恵む、設ける、申し込む、申し出る、用いる、持ち込む、持つ、交す、求める、燃やす、もらう、盛る、焼く、妬く、厭す、約束する、雇う、やる、輸出する、流る、同意する、寄越す、寄せる、予定する、呼ぶ、読む、詠む、利用する、連絡する、沸かす、湧かす、分ける、忘れる、わびる、割る

上述した動詞クラスは原則として[…が…に]に「を格」を組み合わせたものと考えられる。従って、動詞の語義によって「に格」は「で」「へ」「と」「に対して」「に向かって」「として」などに置き換え可能であろう。典型的な動詞をいくつか抜き出して表にまとめれば、次のようである。

格置換	例
に	
に(=で)	痛める、覚ます、潰す、表現する、持つ
に(=へ)	上げる、動かす、移す、送る、落とす
に(=と)	限る、決める、決心する、取り替える、間違える
に(=から)	借りる、聞く、習う、乗り換える、もらう
に(=に対して)	望む、教育する、指導する、催促する、求める
に(=に向かって)	言う、語る、聞く、質問する、説明する
に(=として)	準備する、推薦する、揃える、望む、迎える

なお、森山(1988)では言及していないが[…が…を…に]の「に」が「として」によって置き換えられることは次の用例からうかがえる。

- (64)学生は第一外国語に(=として)フランス語を選択した。(日文)
- (65)デパートは目玉商品に(=として)洋酒をそろえた。(日文)
- (66)私は親友に藍さんを嫁に(=として)推薦した[薦めた]。(日文)
- (67)会社はお客様の昼食に(=として)サンドイッチを準備した。(日文)
- (68)この画家の絵はまだ画集に(=として)まとまっていない。(日文)
- (69)教授は実験結果を論文に(=として)まとめた。(日文)
- (70)この店では大学生をアルバイトの店員に(=として)使っている。(日文)
- (71)監督はその女優を主演に(=として)用いている。(日文)
- (72)姉は最優秀賞に(=として)学校から金一封をもらっている。(日文)
- (73)教授会は外国の専門家を講師に(=として)招いた。(日文)
- (74)社長はその女性を秘書に(=として)雇った。(日文)
- (75)弟は空き缶を鉛筆立に(=として)利用[使用]している。(日文)

これらの例文はいずれも「に」の代わりに「として」を使っても意味の差はほとんど見られない。もともと、例文に共通している「として」は資格・身分・用途などを意味する。言い換えれば、主体の動作を受ける対象は何らかの形で社会的役割を果たしている。

f.[…が…ヲ…に]

このパターンに属する動詞は数がさほど多くはない。例えば、「通う」「転がる」「入る」「曲がる」「滑る」「逃げる」「走る」などがある。次の例文を参照されたい。

- (76)教授はこの道を大学に通っている。(日文)
- (77)ビー玉がテーブル上を向こう側に転がった。(日文)
- (78)彼女は玄関を右に入った。(日文)
- (79)パレードの列は交差点を右に曲がった。(日文)
- (80)彼は新雪の上をゲレンデからふもとに滑った。(日文)
- (81)銀行強盗は銀行から路地を山の方に逃げた。(日文)
- (82)台湾の中央山脈は台湾の中心を西から東に走っている。(日文)

例文(76)～(82)の「ヲ」「に」はそれぞれ「通過点」「終点」を意味しているが、必要があれば、「起点」である「から」を付け加える。(80)～(82)がこの例証である。かくて、[…が…ヲ

…に]の「ヲ」は一義的であるのに対し、「…が…ヲ」の「ヲ」は多義的と言えよう。

(B)補文付きの名詞組

この動詞クラスに属する動詞はその語義によって、補文付きの名詞「こと」と「の」と「ところ」から、一つか二つを選ぶことができる。同時に二つの名詞例えば「の」と「ところ」との間には意味的に微妙な差が見られるが、ここでは、特に深く立ち入らず、基本動詞 1000語の分析・記述だけにとどめる。次の表を見られたい。

…が	～のに	呆れる、感心する、苦心する、足りる
	～ことに	努める、努力する、因る・依る、賛成する
	～の(=こと)に	飽きる、厭きる、驚く、協力する、失敗する、 成功する、同情する、びっくりする、 (=で)迷惑する、気付く、反対する、気付く、 反対する
…が	～のを	埋める、我慢する、苦勞する、直す・治す、 助ける、伝う、世話する、待つ、休む、焼く
	～ことを	表す、意味する、疑う、伝える、実行する、 勉強する、報告する、計画する、示す、勧める、 発見する、防ぐ、(=に)感謝する、 (=に)決まる、決心する、(=に)定める
	～の(=こと)を	諦める、祝う、飛ぶ、遠慮する、 (=に・で)怒る、恐れる、覚える、思い出す、 悲しむ、歓迎する、嫌う、許可する、察する、 禁止する、中止する、後悔する、肯定する、 避ける、悟る、承知する、調べる、知る、 続ける、望む、止める、辞める、許す、止す、 予感する、予定する、読む、理解する、忘れる、 認める、喜ぶ、悩む
	～のを	
	～ことを	注意する、届ける、誓う、願う、報告する、

		命じる、命令する、求める、約束する
	～の(=こと)を	祈る、希望する、記憶する、(=というのを)断る、 知らせる、記す、電話する、譲る、要求する、 利用する、連絡する
…が	～の(=ところ)を	襲う、見せる、見る

この表をざっとみると、補文付きの名詞「こと」と「の」とを両方とも添加させる動詞クラスが一番多いことが分かる。「の」しか取らない動詞クラスは数えるほどしかない。特に[…が…に～のを]を添える動詞クラスは皆無であることに注目されたい。もちろん[…が～の(=ところ)を]を伴う動詞クラスは限られている。基本動詞 1000 語の内、「襲う」「眺める」「助かる」「見付かる」「見付ける」「見せる」「見る」だけである。

一方、「迷惑する」は「に」「で」、「感謝する」「決める」「決心する」「決定する」「喜ぶ」は「を」「に」、「悩む」「怒る」は「を」「に」「で」というふうに「に」を中心とした二つ或いは三つの助詞を添加させる場合もあることに注目してもらいたい。

なお、「断る」の[…が…に～の(=こと)を]が[…が～というのを]に置き換えられるのは興味深い所である。

(C)疑問文付きの名詞組

前述の補文付きの名詞組の下位分類一つである疑問文付きの名詞組についてはこの動詞クラスに入る動詞はほとんどが[…が～か(どうか)(を)]あるいは[…が…に～か(どうか)(を)]の「を」付きの疑問文であるが、「この新技術の開発は不振に陥った会社を再建できるかどうかに関係している。(日文)」「このように漢字がたくさん続いている場合、どこで切るのか困ることがあるが…(日文)」「誰にも、この計画がうまくいくかどうか分からない(日文)」のように基本動詞 1000 語の内「関係する」「困る」「分かる」三語だけが[…が～か(どうか)(に)][…に～か(どうか)(が)]のパターンをそれぞれ取っている。

[…が～か(どうか)(を)]を添加させる主な動詞は次のようである。なお[～か(を)]は疑問詞付きのマルチ・チョイス (multi-choice) 疑問文であるのに対し、[～かどうか(を)]は疑問詞なしの二者択一疑問文である。

…が	～か(どうか)(を)	覚える、思い出す、教える、競争する、研究する 知る、試す、ためらう、予想する、理解する、 忘れる、疑う、決める、決定する、試験する、 実験する、心配する、判断する
…が…に		聞く、質問する、知らせる、説明する、確かめる 尋ねる、話す

(D) 組み合わせられた名詞組と副詞

この動詞クラスに属する動詞は、名詞組が副詞と組み合わせられたものであり、その語義によって、[…が…く]、[…が…に…く]と[…が…を…く]との3種類に分けられている。これらはすでに益岡(1984)によって指摘された所だが、ある特定の動詞クラスはこのパターンを添加させるのが特徴なので、結合価の一つと認めてよかろう。

a. […が…く] […が…を…く] […が…に…を…く]

このパターンを取る動詞クラスは下位分類として[…が] […が…に] […が…を]と対照的に[…が…く] […が…に…く] […が…を…く]の三つに分けられている。注意すべきは[…が…に…を…く]が欠けているところであろう。これらの動詞クラスを表にまとめれば、次の通りである。

…が…く	写る、映る、変わる、代わる、切れる、過ぎる、進む、成長する、 付く、照る、笑う、なる、働く
…が…に…く	写る、映る、聞こえる、対する、乗る、運ぶ、見える、焼ける
…が…を…く	運転する、思う、解釈する、変える、換える、感じる、過ごす、す る、塗る、引く、見せる、見る、踏む

(E) 組み合わせられた名詞組と補文付きの副詞

この動詞クラスに属する動詞は名詞組が補文付きの副詞と組み合わせられたものである。補文は副詞「と」あるいは「て」を添加されるのが特徴で、もっぱら思考・感受・伝達などを表す。これらの内容は動詞の語義によって、次のいくつかのパターンに分けられる。

a. […が～と][…が…を…と][…が…に～と][…が～ものど]

まず、[…が～と]と[…が…を…と]との相関性だが、[…が～と]の[～と]は往々にして[…を…と]置き換えられる。つまり、補文の主体の「を格」による繰り出し操作がなされるのである。これはすでに奥田(1983)の指摘した通りであるが、その境界に一線を画するのは難しかろう。次の表を参照されたい。

[…が～と]	決める、後悔する、叫ぶ、 知る、咳く、怒鳴る	思う、解釈する、感じる、 感心する、誤解する、心得る、
[…が…を～と]	呼ぶ	信じる、想像する、判断する、 ほめる、見える、認める、見 る、恐れる、怒る、叱る、悩 む、みなす

この表から、「呼ぶ」を除いて、[…が…を～と]を取る動詞クラスは同時に[…が～と]を伴うことが分かる。その逆ではない。ただ、客体を表す「に」格を添えると、事情がかなり異なってくる。次の動詞を参照されたい。

[…が…に～と] (注 12)	教える、教わる、書く、聞く、答える、応える、断る、催促する、知 らせる、記す、注意する、伝える、電話する、届ける、述べる、触 れる、返事する、報告する、放送する、約束する、説明する、述 べる
--------------------	--

つまり、上表の内、「説明する」「述べる」に限って、主体の「を格」による繰り出し操作がなされるのである。言い換えれば、[…が…に～と]と[…が～と]とは「に格」の有無によって、その性質を異にしている。実際、「述べる」と「語る」は意味的にかなり近いけれども、前者は「を格」による繰り出し操作ができるのに対し、後者は不可能であることに注目されたい。

思うに、「ように」は「ようだ」の連用形で、手段、目的、方法、様態、命令、願い、望みなど多種多様の意味役割を持っている。従って、[～するよう(に)(と)]が多くの場合[～してほしい][～しろと][～しようと]に置き換えられることはすでに 4.3 節で触れたところであ

るし、また[～]ないし[～ことを]か[～ことに]と相関性があることは次の用例からうかがえる。

(83)運転手は乗客に、整列乗車するように注意する。(日文)

(83)父は娘にもっと「早く帰りなさい」と注意した。(日文)

(84)先生は学生たちに、遅刻が多いことを注意した。(日文)

(85)市の広報車が土曜日に神聖なる一票を投票するように住民に触れてまわっている。(日文)

(85)市の広報車が明日は停電だと住民に触れてまわった。(日文)

(85)消防士は避難訓練を行うことを近所の家々に触れて歩いた。(日文)

かくて、[～するよう(に)(と)]は[～と]や[～ことを]などにも接続していると言える。ちなみに「教育する」が[…が…を～するよう(に)(と)]のように、「に格」ではなく「を格」を取るの興味深い所である。次の用例を参照されたい。

(86)親は息子を、立派な社会人になるように教育している。(日文)

b.[…が…に～しると]

このパターンを伴う動詞クラスは命令などを含意しているので、客体の「に」を添加させるのは当然であろう。なお、この類の命令は時にやや柔らかい表現である[～しなさいと]に置き換えられる。「合図する」「強いる」「命令する」「命じる」「要求する」の如きがこクラスである。

c.[…が～しようと]

このパターンを取る動詞クラスはすでに第3章で指摘されているから、ここでは深く立ち入りはしない。この類の動詞クラスは主体が動きを通じて対象に変化をもたらそうとする企図を常に持っているので、他動詞を取るのが普通であろう。例えば、次のようである。

頑張る、苦心する、工夫する、計画する、決心する、志す、試みる、努める、努力する、証める、思う、誤解する、察する、悟る、信じる、見なす、理解する

d. […が～(の)(ではない)かと]、[…が…に～かと]

[…が～(の)(ではない)かと]を取る動詞は数が限られている。今、採集した例は「疑う」「恐れる」「心配する」「思う」「考える」5個だけである(注 12)。「疑う」に関しては、主体の「を」による繰り出し操作が可能である。

[…が…に～かと]を取る動詞クラスは「聞く」「質問する」「尋ねる」などであり、いずれも意味的に「人に質問する」ことで一致している。

e. […が～するよう(に)(と)]

まず、次の表を参照されたい。

[…が～するよう(に)(と)]	頑張る(注 13)、工夫する、心掛ける、支度する、努める、努力する
[…が…に～するよう(に)(と)]	拝む、教える、教わる(注 14)、催促する、誘う、勧める、頼む、注意する、注文する、伝える、願う、触れる、命令する、命じる、要求する、よびかける、連絡する

しかし、「訴える」「申し出る」「約束する」「悩む」「迷う」などの動詞クラスは似たパターンを取っているが、意味的にちよつと違っている。もともと、その境界に一線を画するのは難しいのだが、次の用例を参照されたい。

- (87)新聞は読者に、自然を守ろうと訴えた。(日文)
- (88)彼は、その城まで案内しようと申し出た。(日文)
- (89)私は友達と駅前で会おうと約束した。(日文)
- (90)卒業生はどういう仕事に就こうと悩んだ。(日文)
- (91)兄は手紙にどう書こうかと迷っている。(日文)

例文(87)(88)(89)では、意味的に勧誘と取るほうがいい、特に(89)では、「友達」の「と格」を添加させることで、決まって勧誘を意味することになる。(90)(91)では「悩む」「迷う」は動詞自身の意味的役割によって、その主体が行動を躊躇することを意味しているから、[~しようか]と「と格」を組み合わせたものを伴うのである。

f.[…が…に～してほしいと]

このパターンを取る動詞は、ほとんど客体の「に格」を添えるのが特徴であろう。つまり、期待、願望を達するのに他力を要する、いわゆる他力本願の表現タイプと言えるわけである。次の例文を参照されたい。

- (92)住民は市に、騒音を何とかしてほしいと訴えた。(日文)
 (93)被害者は警察に、事件を捜査してほしいと頼んだ。(日文)
 (94)組合側は会社側に、約束を早く実行してほしいと注文した。(日文)
 (95)父は親友に金を融資してほしいとお願いしている。(日文)
 (96)人々は、戦争が早く終わってほしいと望んでいる。(日文)

例文(92)～(96)では、「訴える」「頼む」「注文する」「願う」はいずれも「に格」を添加させる。(96)では、事件の当事者は無情物なので、「に格」なしの形で表現がなされている。

g.[…が～て]

このパターンを取る動詞クラスは往々にして喜び、怒り、哀しみ、楽しみなどの感覚を表すのに用いられる。主な動詞は、次のようである。

怒る、驚く、がっかりする、悲しむ、感心する、腐る、困る、失礼する、楽しむ、悩む、びっくりする、参る、弱る、沸く

ただ、この類の動詞の一部は、話者の主観性を表出することが義務づけられているので、次のような用例に即しては、「困る」の主体は「子供」ではなく「話者」とであると解釈されよう。

(97)子供はすぐ風邪を引いて困る。(日文)

4.5 まとめ

本章では、動詞述語を中心に、結合価の範疇素性である<名詞組>と<副詞>を分析することによって、①<名詞組>同士間と<副詞>同士間の置換性②<名詞組>と<副詞>と組合わさった動詞クラスのタイプを解明した。これが形態的結合価による日本語の基本文型を確定する試みへの第一歩である。

注:

(注1) 中右(1986)を参照されたい。

(注2) 趙(1990b)では「が」「に」「を」の三つの格を必須成分に限ることにした。係助詞「は」は主題が対比を意味することから、必須成分として扱われていないのが普通だが、国広(1974)・石綿ほか(1990)によると、日本語では全体「は」、部分「が」というパターンを取る傾向が大いにあるというので、「…は…が」も一種の動詞クラスと認めてよかろう。特に自動詞の場合にはこの傾向が強く見られる。例えば、「二人は趣味が合う」(日文)「息子は成績が上がっている」(日文)「彼は政界で顔が売れている」(日・29)「妹はスタイルが姉より落ちている」(日文)「父は家を買うのに諸経費300万円かかった」(日文)の如きがその例証である。しかし、主題を表す「は」を含めた文は全体として連体修飾語になりえないという難点もあって、本章では必須成分から除外することにした。勿論この問題の分析は今後の課題にしたい。

(注3) 言葉の位相とは地域、身分、職業、性別、年齢などの違いや、話し言葉、雅語と俗語など使われる場の違いによる区別というのが普通だが、ここでは特に話し手や聞き手などを言語形式に関連するものの中の動詞の敬語をさす。これはもともと形態論的語尾活用に関与しないが。

(注4) 奥田(1978)はA.A.ホロドヴィッチの影響を受けたものと考えられる。

(注5) [～するよう(に)(と)]の「に」「と」はどの条件の下で省略すべきかについては今後の課題としたい。

(注6) 例えば石綿や仁田や村木などでは、さまざまな分類法が試みられている。結局、森羅万象を規則正しく分類するのは決して容易ではないから、上述したものはいずれも試案にすぎない。

(注7) 「大勢の人が会議に出席した」、「彼は事業に失敗した」のように「欠席する」「失敗する」は「に」しか取らないことに注目されたい。もちろん、「失敗する」は「で」を取りうると一言付け加えたい。しかし、形式名詞を添加させる場合は、「に」を取るものがほとんどである。例えば、「政府は宇宙ロケットを打ち上げること(の)に失敗した」(日文)。これは次の(49)(50)(51)と対照的に「失敗する」にとつて、「で」より「に」の方がもっと本義である証拠であると思われる。

(注8) 例えば「構える」は[…が…を]を取るのに対し、その否定形たる「構わない」は例

えば「先生が身なりを構わない」(日文)「息子は用事に構わず遊びに飛び出した」(日文)のように[…が…を]と[…が…に]に跨っているので、「決める」などと同様に「を」の方がより本義であろう。

(注9) 例えば、「ワルツを踊る」「人生を生きる」「民謡を歌う」などである。

(注10) これらの動詞は名詞組[…が…ヲ]一つだけを取るものである。

(注11) 例えば、「日本は戦争を放棄すると憲法に[で]決めた」(日文)の如きは[…が…に～と]を取っているが、意味的にこの動詞クラスと違う。

(注12) 『心配する』とほぼ同じ意味である」といった慣用語もこの種のパターンに属する。

(注13) 「頑張る」は目的程度によって「～するために」「～するように」「～しようと」のいずれかを添加させるのが特徴であろう。勿論この使い方ははある特定の動詞クラスにしか通用しない。

(注14) 「に」は「から」に置き換えられる。